

《正岡子規（36）の続き》その300

天涯茫茫生

中村不折の続き

この図は、不折による子規の肖像画である。高浜虚子が、子規をテーマとして書いた小説「柿二つ」を出版したとき（大正4年）、口絵として不折に画いてもらったものである。今回、小生が利用したものは、昭和61年、永田書房の復刻版によるものである。

この本の序に、虚子は子規を正しく書こうと思つて書いたもので、少しも虚構を加えず、事実其儘を写生したと云つてゐる。それかといつて、子規を伝したといふことは出来ない。子規の言行はいかなる些細なことでも事実に相違せぬようにつとめたけれども、しかし心理上のことは虚子の想像になつたもので、その点からいふとやはり小説で、伝記ということとはできないという。

虚子の書くことに、不折も同調して、子規を正しく描写することにつとめたものと思う。この図の元になつたかと思われる、子規の横向きの最後の写真がある。明治33年12月撮影のものだ。それを忠実に模したものが、この図である。辱交中村不折写とある。不折の子規に対する敬意が充分こめられていると思われる。交りをかたじけなくする意で、子

規と知り合いであることをへりくだつて云つてゐるのである。辱知ともいふ。



子規居士の肖像 中村不折画